

マッド・サイエンティストとモンスター

高 階 悟

I. 人間にとって科学とは

1999年ハンガリーのブダペストで開催された「世界科学会議」では、科学の定義として「知識の進歩のための科学」、「平和実現のための科学」、「持続発展のための科学」、「社会のための、そして社会の科学」の4つの面が明らかにされた。¹ 近代科学は、イタリアの天文学者ガリレオ (Galileo Galilei, 1564-1642) や万有引力の原理を発見したニュートン (Isaac Newton, 1642-1727) などが活躍した時期に発展し、人類の進歩に大きな貢献をした。17世紀に生まれた新しい考え方は、古代や中世の絶対的な神への信仰に基づいた世界観や宇宙観から、合理的、客観的、体系的、人間的な学問への道を切り開いた。² 従来の科学者は、時には好奇心や野心に駆られて社会の持続的発展のためにさまざまな発見や発明を通して自然や宇宙の神秘を解明し、人々の暮らしを豊かにし、文明の著しい進歩に大きな役割を果たしてきた。しかし、20世紀になり、多くの科学者が関わった第二次世界大戦中の原子爆弾製造計画のマンハッタン計画 (Manhattan Project, 1941-45)、そして1945年の広島・長崎への原爆投下の後、科学者の科学的発見の結果に対する社会的責任の問題が浮上してきた。アメリカの原子爆弾利用の衝撃から一部の物理学者は、「社会のための科学」や「平和実現のための科学」を考えるようになり、世界各国の文学者は科学や科学技術の進歩に懐疑的なテーマを扱った作品を次々と発表した。

20世紀後半になり、さまざまな分野でのGNR技術 (G=遺伝子、N=ナノテクノロジー、R=ロボット) の発達著しくなるにつれ、科学研究が企業等と連携を持ちながら組織化され、巨大化するにつれて科学の本質が変質してゆく。ある国家権力や資金を持つ企業というクライアントの依頼で生み出された新しい発明・発見や新しく製造された機器が次々と世界の市場に出回るようになる。しかし、それらは他の国民、民族や動植物などに損害や危害を加える怪物^{モンスター}になる可能性を含んでいる。人間は科学を通じて新しい創造物を生み出すことができるが、その創造物が人間に危害を加えるモンスターになるかもしれないという不安や恐怖から完全に免れることができない。そのように科学の研究成果が及ぼす人間社会や地球環境への損害や災害を避けるために、1974年以降アメリカでは、科学者の研究内容を審査し承認するIRB (Institutional Review Board) 「研究機関内審査委員会」が制度化された。日本では研究者や法律関係者などが安全性や倫理性などの観点から科学者の研究内容を審査する「研究倫理委員会」と呼ばれている組織がある。

古今東西の世界文学には、常軌を逸した^{マッド}サイエンティスト^{サイエンティスト}によって造られたさまざまなモンスターの物語がある。その原型となる物語が19世紀前半に発表された。文学史上最初のSF小説と称されるイギリスの女流作家メアリー・シェリー (Mary W. Shelley, 1797-1851) の『フランケンシュタイン：または、現代のプロメテウス』 (*Frankenstein or The Modern Prometheus*, 1818) である。これから19世紀イギリス小説の中のマッド・サイエンティストと怪物^{モンスター}の関係を明らかにし、20世紀のマッド・

サイエンティストを検証し、マッド・サイエンティストや怪物^{モンスター}の暴走を止める方策を考察する。

II. ヴィクター・フランケンシュタインと人造人間^{モンスター}

一般的に、フランケンシュタインとは、狼男や吸血鬼ドラキュラと同じような醜い怪物^{モンスター}の名前として知られている。それは1931年ユニバーサル映画製作のホラー映画『フランケンシュタイン』の中で人造人間の名前をフランケンシュタインとし、ボリス・カーロフが演じた顔に縫い目のある怪物フランケンシュタインが原作以上に強い印象を与えたためである。正確には、フランケンシュタインという用語は、メアリー・シェリーの小説『フランケンシュタイン』の中で人造人間を造った若い医学生の名前ヴィクター・フランケンシュタインに由来している。小説の中のフランケンシュタインは、創造者であり、科学者であり、芸術家であり、学者であり、時にはわれわれ人間をも意味している。人間が生み出した生命体や新しい機器が、人間の無責任な対応によってコントロールができなくなったり、または暴走した時にその被創造物は他の人々に害をもたらすモンスター^{モンスター}に変わることがある。

小説『フランケンシュタイン』の主人公ヴィクター・フランケンシュタインは、スイスからドイツのインゴルシュタットの大学に進み、ヴァルトマン教授 (M.Waldman) の近代化学の講義を聴き、神秘的な錬金術の時代から合理的な科学の時代への移り変わりを痛感する。若き医学生フランケンシュタインは、その教授の言葉に励まされ、「新しい道を開き、知られざる力を探ってみよう。創造のもっとも深い神秘 (the deepest mysteries of creation) を世界に解き明かしてみせる」³ と決意する。彼は生理学や解剖学を学び、ヴァルトマン教授の研究室の実験器具を使い、死体置き場にある死体に生命を吹き込もうとする。2年後、フランケンシュタインは、ついに黒い髪、眼、口、四肢の均整のとれた人造人間を作り上げるが、その実際の人造人間の外見を見て、彼は恐怖と嫌悪感でいっぱいになりその場から逃げ出してしまう。フランケンシュタインは、人造人間を「このあさましい生き物」、^{さげす}「破廉恥な怪物」 (miserable monster)、「悪魔のような屍」⁴ と蔑む。

誕生した人造人間は、「生みの親」からの庇護も名前も与えられずに放置されてしまったのである。⁵ 生き物に名前を付けることは、創造者や所有者の感情や意向を反映し、その被創造物の存在を認知することである。赤ん坊は、男性か女性を表す名前をつけられ、人間の手で愛情をもって育てられることによって人間に成長するのであり、もし両親が子供を育児する義務と責任を放棄したなら、その子はモンスターになる可能性が高くなるであろう。

この見放された人造人間は、実験室を出て、森の中で木の実を採取して生き延び、みすばらしい小屋を見つけてそこに住む。その近くに住むド・ラセー家の人々を観察し、家族の会話から言葉を学び、道で拾った『失樂園』や『若きウェルテルの悩み』などを読み、知性と感情を持つようになる。人造人間は、「自分は何者か」 (And what was I ?)⁶ と悩み、孤独に耐えかねて、愛されたいと切望してド・ラセー家のドアをノックする。盲目の老人と話しをすることができたが、そこへ家族の若者が来て、醜い人造人間は棒でたたかれ、追い出される。人造人間は、外見で判断して排斥する人間に絶望し、憎悪と復讐の念で胸がいっぱいになり、怪物^{モンスター}に変身する。激しい怒りに燃えて、ド・ラセー家の住居に火を放つ。次に、人造人間を見て「怪物め！醜い化け物」と言ったフランケンシュタインの末弟を絞殺し、「生みの親」フランケンシュタインを探し求めてジュネーブに向かう。

フランケンシュタインは、アルプスの氷河で再び敵意に満ちた人造人間にであい、「悪魔め」と再び蔑み追い払おうとする。怪物^{モンスター}となった人造人間は、フランケンシュタインに「おれに対して負っている義務を果たすがいい、そうすればこちらもおまえと人類すべてに義務をつくそう」⁷ と言って、女性の伴侶を要求する。しかし、フランケンシュタインは、創造者としての責任を果たすことなく後悔と苦悩の日々を送り、怪物^{モンスター}はくり返し創造者に裏切られ、その復讐のためにフランケンシュタインの友人や許嫁を次々に殺害する。フランケンシュタインは暴走を始めた怪物^{モンスター}を追いかけて、北極海まで行き、そこで次のような言葉を残して息絶える。

熱狂的な狂気の発作で、私は理性的な生き物を創造し、彼に対してできる限り彼の健康と幸福を保証するべきであった。それが私の義務であった。だが、それ以上の卓越した義務があった。人類に対する義務を先に考慮しなければならなかった。⁸

フランケンシュタインは、怪物^{モンスター}を罵り、その非道な悪事を批判しながら、自分の「熱狂的な狂気」や「科学的な野心」が怪物^{モンスター}を生みだし、家族や友人のみならず、自分自身の破滅を招いたことを後悔している。この小説の中で起きた連続殺人事件の責任は、復讐の鬼と化した怪物^{モンスター}の自己責任として片づけることもできるが、創造者であるフランケンシュタインがすべての責任を負うという解釈も成り立つ。⁹ フランケンシュタインは、科学的な知識を用いて「神の領域」に足を踏み入れた悪魔的科学家であり、人造人間を製造した責任は大きい。また、一連の事件は、19世紀という時代を投影しており、フランケンシュタインと怪物は、運命の犠牲者とする解釈もある。

19世紀の科学史上の大きな出来事の一つは、ノーベル (Alfred Bernhard Nobel, 1833-96) のダイナマイトの発明である。スウェーデン生まれのノーベルは、父親の仕事を受け継ぎ、クリミア戦争 (Crimean War, 1853-56) 時代からの武器や機械を製造する事業に専念し、1866年に安全性の高い固体爆薬 (ダイナマイト) の開発に成功した。強力なダイナマイトは炭坑やトンネル工事などの作業に利用され、ノーベルは世界各地に爆薬製造工場を作り、戦争により巨額の富を得たために「死の商人」¹⁰ とも呼ばれるようになった。ノーベルはダイナマイトが戦争に利用されることを悔やみ、世界平和を願って彼の遺言として人類に貢献した人物に与える「ノーベル賞」設立基金を残した。ノーベルのダイナマイト発明の功罪は、科学者のモラルと社会的責任の問題を提起している。

III. 19世紀のマッド・サイエンティスト

メアリー・シェリーの19世紀の小説『フランケンシュタイン』の主人公は、恐ろしい人造人間を造り、自滅したマッド・サイエンティストの原型である。その後、フィクションの世界では野心的なマッド・サイエンティストによって奇想天外な発明や実験が行われ、反ユートピアの世界がさまざまに描かれている。奇想天外な発明や発見として、タイムマシン、反重力装置、超光速宇宙船、物質伝送、不老不死、若返り、生命創造、透明人間、ESP (テレパシー)¹¹ などをあげることができる。

19世紀のマッド・サイエンティストとして二重人格を扱った R. スティーヴンソン (Robert Stevenson, 1850-94) 作の小説『ジキル博士とハイド氏』 (*The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*, 1896) の財産家のジキル博士 (Dr. Jekyll)、人間の透明化に成功した SF 小説『透明人間』 (*The Invisible Man*, 1897) の科学者グリフィン (Griffin)、人体実験を扱った『モロー博士の島』 (*The Island of Doctor Moreau*, 1896) のモロー博士 (Dr. Moreau) などをあげることができる。ジキル博士は、薬を飲むことにより、まったくの別人格であるハイド氏に変わること成功するが、犯罪を犯すハイド氏の暴走をコントロールすることができず、ジキル博士は遺書を残して自殺をする。貧しい科学者グリフィンは、動物を使って透明になる実験を繰り返し、ついに自分自身が透明になることに成功する。しかし、透明人間になって金貨を盗み、殺人を犯してしまい、警察や群衆に追われ、撲殺されてしまう。独身の老人モロー博士は、孤島で動物の生体解剖を行い、人間に改造した約60の獣人と生活をしていたが、豹男が野生の兎を見て、肉食動物の本性に目覚め、モロー博士は肉食動物人間に滅ぼされる。

『透明人間』と『モロー博士の島』の作者 H. G. ウェルズ (Herbert G. Wells, 1866-1946) は、文明の進歩に悲観的になり、人間は人間を創りし者を滅ぼすという¹² 「宇宙的悲観論」 (cosmic pessimism) を基調にした科学小説を書き、晩年は科学以外のものに救済を求めたイギリス作家である。ウェルズは、SF 小説『モロー博士の島』でフランケンシュタインに続く典型的なマッド・サイエンティストを描いている。この小説は、発表後何度も映画化され、派生作品や映画もある。映画の

タイトルもさまざま『獣人島』(Island of Lost Souls, 1933)、『ドクター・モローの島』(The Island of Dr. Moreau, 1977)、『D.N.A./ドクター・モローの島』(The Island of Dr. Moreau, 1996)などがある。

『モロー博士の島』の物語は、英国船が難波して貨物船に助けられた主人公の科学者が、積み荷の動物と一緒に孤島に上陸するところから始まる。主人公は、その島で60歳の白髪のもロー博士と彼の助手に出会う。次に、人間でもなく動物でもない多くの「人間に改造された動物」(humanized animals)¹³ または「造られた怪物」(monsters manufactured) に遭遇する。白髪で老人の科学者モロー博士は、典型的なマッド・サイエンティストの特徴を表している。残酷な動物実験を暴露された生体解剖学者モロー博士は、イギリスを追われ、この孤島で動物に対する生体解剖実験を続け、言葉^{うまさ}を話す猿男、豚男、狼人間、牛人間、豹人間、馬^{うまさ}犀人間、シュパード人間などを造り出していた。主人公は、この島で出会った怪奇な出来事やさまざまな獣人 (Beast People) に恐怖を感じながら、生体解剖にとりつかれているモロー博士と獣人の様子を次のように描写している。

But he was so irresponsible, so utterly careless. His curiosity, his mad, aimless investigations, drove him on, and the things were thrown out to live a year or so, to struggle and blunder and suffer; at last to die painfully.¹⁴

小説『モロー博士の島』では、獣人が「造られた怪物^{モンスター}」として描かれているが、好奇心と常軌を逸した探求心で獣人を造る科学者も怪物^{モンスター}にみえてくる。この二重性は、医学生フランケンシュタインと彼が造りあげた人造人間の関係と同じである。モロー博士は、倫理性 (ethics) に悩まされることなく生体解剖の研究に没頭し、人間に改造した動物を次々に造り、それらの獣人を自分の奴隷にして孤島の秩序を保っていた。しかし、人間が食用に飼っていた兎の生肉を食べた豹男は、動物の本性にめざめる。動物の死骸を見た肉食の獣人たちは動物へと退化し始め、島の秩序が崩壊し、モロー博士は肉食動物人間に殺害される。主人公は恐怖の獣人の島を脱出し、人間社会にもどる。

しかし、主人公はロンドンの街でもモロー博士の孤島で体験したような不安と恐怖を感じて次のように述べている。

I could not persuade myself that the men and women I met were not another, still passably human, Beast People, animals half-wrought into the outward image of human souls; and they would presently begin to revert, to show first this bestial mark and then that.¹⁵

主人公がロンドンの街で感じたのは人間の獣性である。出会った人々は、猫のようにすり寄ってくる女、もの欲しげな男、鹿のように傷ついた労働者、獲物を待っている男たちであった。社会に獣のようなモンスターが現れるのはマッド・サイエンティストのせいだけでなく、時代の風潮が人々の運命を左右するという事実、つまり産業革命後の競争社会の中では普通の人間が獣人^{モンスター}に変わる一面を明らかにしている。20世紀の市場主義社会では、19世紀より社会の弱肉強食の競争が激しくなってゆき、「普通の人間が怪物^{モンスター}に変わる時」が多くなり、マッド・サイエンティストの活躍する土壌が整ってゆく。

IV. 20世紀のマッド・サイエンティスト

「君が、次のアインシュタインになるか、フランケンシュタインになるかは、誰にもわからない」¹⁶ これは1993年ボストン科学博物館の小学生向けの宣伝文句である。科学博物館に展示されるのは天才物理学者アインシュタイン (Albert Einstein, 1879-1955) のような科学者の業績であり、狂

気の科学者（マッド・サイエンティスト）の業績ではない。しかし、「シュタイン」（-stein）という語尾の名前は、ユダヤ人に多く、知性の高い人物を思い起こさせる。二つの名前は、善と悪との対照的な人物像でありながら、「天才と気違いは紙一重」ということを言い当てているようでもある。また、天才科学者アインシュタインは、アメリカの原爆開発と広島・長崎への原爆投下にまったく関係ないとは言えない。1939年アインシュタインはアメリカに亡命し、当時のルーズベルト大統領へ「ドイツがウランによる新型爆弾を開発する可能性があること」を書簡で進言した。¹⁷これが発端となり、20億ドルの巨費と10万人以上の科学者・技術者を動員したマンハッタン計画が極秘に進められた。アメリカの産官軍複合体のマンハッタン計画が、結果としてマッド・サイエンティストを生んだという説もある。¹⁸

20世紀の典型的なマッド・サイエンティストは、監督スタンリー・キューブリック（Stanley Kubrick, 1928-1999）が製作した映画『博士の異常な愛情：または私は如何にして心配するのをやめて水爆を愛するようになったか』（*Dr. Strangelove or: How I learned to Stop Worrying and Love the Bomb*, 1964）に登場する兵器開発局長官ストレンジラブ博士（Dr. Strangelove）である。¹⁹この映画には、自国の利益を優先するアメリカ大統領、反共思想に取り憑かれた将軍、大量殺戮可能な核兵器の開発に関心を抱くストレンジラブ博士などが登場し、物語はアメリカとソ連との核戦争による世界の終末を暗示して終わる。確信的なマッド・サイエンティストのストレンジラブ博士は、実在の水爆を開発した科学者または核戦略の必要性を説いた政治家などをモデルにしているなどさまざまな説がある。イギリス映画『博士の異常な愛情』のストレンジラブ博士は、核戦争を心配するのを止めたマッド・サイエンティストであり、水爆を愛する怪物でもある。

手塚治虫（1928-89）の漫画の世界にもマッド・サイエンティストが登場している。『鉄腕アトム』（1952）の主人公アトムは、人類の平和のために戦った人間の良心と機械力の完全な統一像として知られている。²⁰しかし、アトムは天才科学者と称される天馬博士が交通事故で亡くなった息子飛雄の身代わりとして作った優秀なロボットである。科学者は個人的な感情や欲望でアトムのようなロボットや人造人間を作り、そしてクローン人間を作り出すかもしれない。天馬牛太郎博士は、一時的にうり二つのロボットの飛雄に慰められるが、飛雄が成長しないことに怒り、サーカスに売り飛ばす。天馬博士は優れたロボットを製造しながら、創造者としての義務と責任を放棄したマッド・サイエンティストである。この創造者に見捨てられた少年ロボットがそのまま進化してゆくと怪物モンスターに変わる可能性もあったが、サーカスの団長がこのロボットに「アトム」と名付け、ここから「生みの親」の手から離れた「アトム」の物語が始まる。その後、「育ての親」となるお茶の水博士に引き取られるのである。お茶の水博士は、アトムを小学校に通わせ、両親ロボットまで造ってやり、10万馬力の正義の味方鉄腕アトムを生み出すのである。漫画『鉄腕アトム』にも世界の平和を目指すアインシュタイン・タイプ（お茶の水博士）と個人的な欲望で行動するフランケンシュタイン・タイプ（天馬博士）の対照的な科学者が描かれている。

手塚治虫の長編漫画『火の鳥』の「復活編」（1970-71）には個人的な野心に取りつかれたマッド・サイエンティスト、ドク・ウィークデー博士が登場する。白髪の老人ドク・ウィークデー博士は、宇宙で人間の臓器密輸貿易団の女ボスと少年レオナを合体させる人体実験に取り組む。25世紀に、ウィークデー博士は、「ふたつの人間の肉体がまじりあって新しい人間をつくる！」²¹医学の芸術を造り出すことに成功する。しかし、新しい少年レオナは、臓器の拒否反応に苦しみ、錯乱状態になり、見境もなく銃を発砲し、ウィークデー博士を殺し、臓器密輸貿易団員に銃殺されてしまう。

マッド・サイエンティストと称される科学者の特徴として、次の三点を挙げるができる。マッド・サイエンティストは、好奇心や探求心に駆られて研究をし、人間社会の倫理を無視する傾向がある。偉大な発見や発明において、新しい科学とその社会の倫理は、車の両輪のようなものである。片方だけが進歩すると、全体のバランスが崩れ、いつか破局を迎えることになる。20世紀、科学技術の専門化や細分化が著しく、科学者は社会から分離して暴走しやすい環境にある。二つ目は、マッド・

サイエンティストの研究や開発の動機が、巨万の富を築きたい、名声を得たい、研究上のライバルに対する反発や対抗心、世界を征服したい、神になりたいなどである。²² 個人的な野心や欲望を満足させるために勝負を競う「科学という名のゲーム」²³ から生み出される研究成果は、人間社会や地球環境に多大な損害を与え、時には科学者自身の自滅を招くこともある。三つ目は、第一次世界大戦中の毒ガスの発明以来、あらゆる分野の科学研究が戦争や紛争に利用されるようになり、新たなタイプのマッド・サイエンティストが出現した。科学者は科学研究の成果を買ってくれる顧客（クライアント）が誕生したため、国家や企業のクライアントの要請に対して義務と責任は果たそうとする。²⁴ 企業は自社の製品や商品に対する社会的責任（cooperate social responsibility）があるように、科学者も自分の造り上げたロボットや機器に対する道義的な責任がある。しかし、マッド・サイエンティストは、「商品としての科学」に対する資金援助や報酬は受け取るが、不測の事態が起こるとその場から逃げたり、創造物に対する責任を放棄し、それが他の民族や動植物に与える損害や災害に対する責任を負わない。

小説、映画、漫画、²⁵ 音楽、その他の分野におけるさまざまなタイプのマッド・サイエンティストの登場は、科学技術の功罪を象徴しており、科学技術や生命科学の進歩に伴う危険性と矛盾を分かりやすく具現化し、科学の進歩に警鐘を鳴らしている。マッド・サイエンティストは時代の落とし子であり、GNR 技術（G＝遺伝子、N＝ナノテクノロジー、R＝ロボット）が発展し、社会が複雑になるにつれて、マッド・サイエンティストが増加（Growing Mad Scientists）²⁶ してゆく。

V. 日本のマッド・サイエンティスト

新戸雅章は『逆立ちしたフランケンシュタイン：科学仕掛けの神秘主義』の中で、日本のマッド・サイエンティストとして第二次世界大戦中の石井四郎軍医（1892-1959）とオウム真理教のエリート科学者村井秀夫（1958-95）と林郁夫（1947～）をあげている。石井四郎は、京都帝国大学医学部を優秀な成績で卒業して軍医になり、旧満州に悪魔の部隊と呼ばれる関東軍731部隊を設置した。戦時中に約3,000人の戦争捕虜に対して人体実験や生体解剖をおこなったと言われている。第731細菌部隊の活動についての記録として森村誠一の実録『悪魔の飽食：「関東軍細菌部隊」恐怖の全貌』（1981）が有名である。戦争という国家の集団的狂気の中、ナチス・ドイツの科学者のように非人間的な大量殺戮や虐待を手助けするマッド・サイエンティストが活躍する。

中国大陸に進出した日本軍は、1933年中国東北地方のハルピンに、石井部隊と呼ばれる細菌戦秘密研究所（後の「満州第731部隊」）を設置した。この部隊は、軍医石井四郎がヨーロッパ視察旅行の後に「細菌を兵器として転用する試みがナチス・ドイツで進んでいる」²⁷ と細菌部隊の創設を提案し、日本陸軍の支援の基に設置された。この部隊では、憲兵等に捕らえられたロシア人、中国人、モンゴル人捕虜を「丸太」と呼び、一人ずつ三桁の番号をつけ、生体実験の材料として扱った。健康な男女の「丸太」に対してペスト、コレラ、チフス、梅毒スピロヘータなどの生菌を注射し、二日に三人の割合で実験材料を使用したと言われている。²⁸ しかし、1945年戦況が日本軍に不利になり、731部隊の隊員は「丸太」に予防注射とだまして青酸カリを注射して次々に殺害し、証拠を隠滅するために軍事施設を爆破し、終戦前の8月11日に秘かに日本本土への引き揚げを始めた。終戦後、連合国軍最高司令官総本部（GHQ）は、極東国際軍事裁判で戦争中の「人道に対する罪」などを追求したが、731部隊の人体実験の情報をアメリカ軍に提供することを条件に、石井四郎隊長と隊員全員は戦争犯罪（捕虜虐待）を問わなかった。実在のマッド・サイエンティスト石井四郎は、戦時中の若い頃は花街で芸者連れの豪遊で知られ、贈収賄疑惑で逮捕もされた。戦後は、千葉の田舎で余生を送り、喉頭癌のため67歳で亡くなった。731部隊に配属された軍医、衛生将校、技術将校、薬剤師などの中には、部隊での生体実験を基礎に医学界などで名をあげた人物もいる。²⁹

なぜこのような科学を利用した残酷な人体実験が行われ、その情報がアメリカ軍に受け継がれたの

だろうか。すべては戦争という非常事態、集団的狂気が可能にした非人間的な出来事である。なぜ細菌の研究をし、細菌戦に備えるのかという問いに対して731部隊の関係者は「勝か負けるかの戦争をしている最中に、国を守るために必要なことだ。敵も同じ細菌を使用しているのだから、われわれはこれに対抗できる細菌兵器を作るのだ」³⁰と証言している。戦時中の他民族に対する非人間的行為は、愛国心によって正当化され、誰も中国人などの被害者に対して責任を取ることもなく歴史の一ページに刻まれている。但し、このような集団的な狂気は戦時中だけでなく、日常の社会でも起こる可能性がある。

平和な日本社会でおきた1995年の地下鉄サリン事件に関わったエリート科学者は、マッド・サイエンティストである。オウム真理教信者は、教祖麻原彰晃（松本智津夫、1955～、死刑囚）の指示に従い人間が開発した化学兵器の神経ガスサリンを混雑する地下鉄の車内で散布し、死傷者6,265人（死者13名）を出し、世界初の毒ガステロ事件を引き起こした。オウム真理教の中核メンバーで科学技術大臣村井秀夫は、一連のオカルト・テクノロジーに関わり、毒ガスサリンの製造に係わり、無差別テロの実行を指令した。サリン事件の統括指揮の村井秀夫は、理工系の一流大学を卒業した科学エリートであるが、オウム真理教に入信してからは教祖の脳波と信者の脳波を同調させるためのヘッドギア（PSI）装置を発明し、教団の終末理論を信じた結果、フセイン大統領（Saddam Hussein, 1937-2006）がイラン・イラク戦争でクルド人地区に散布した化学兵器サリンを無差別殺人のために東京で使用した。マッド・サイエンティスト村井秀夫は、事件後に教団総本部前で右翼団体構成員によって刺殺され、亡くなった。

オウム真理教の治療省大臣林郁夫（1947～）は、マスクをして地下鉄千代田線に乘車し、サリンのポリ袋に傘の先を突き刺してすぐに電車を降りた。教祖に「サリンを撒け」と命じられた林郁夫は、一流大学の医学部を卒業し、国立療養所晴嵐荘病院の循環器科の医長を務めたスーパーエリートであったが、突然家族とともにオウム真理教に入信し、無差別殺人のためにサリンを散布する実行犯になった。³¹ 逮捕後の林郁夫は、捜査に協力的で、彼の全面自供により事件の全容があきらかになり、検察はこのことが自首に相当すると判断し、5人の実行犯の中で林郁夫だけには死刑ではなく無期懲役を求刑し、一番で刑が確定し服役中である。われわれは、林郁夫の裁判中の証言から、人の命を救う医師としての良心を彼の中に窺き見ることができ、少し救われた気持ちになる。³²

なぜオウム真理教がこのような無差別テロ事件を起こしたのか。なぜマッド・サイエンティストが平和な日本に出現したのか。なぜ高学歴の理系の若者が、次々とオウム真理教に入信し、殺人を犯したのか。その原因の一つは、オカルト宗教のオウム真理教の教義にあり、エリート科学者がクライアントの麻原彰晃の要請に応じて殺人兵器を製造したためでもある。科学者がクライアントに対する義務と責任を優先させるか、「社会のための科学」を重視するかは個人の判断にゆだねられている。オウム真理教事件の一部は、まだ裁判中でもあり、十分に解明されていない部分がある。この事件を「日本の社会の縮図」とするという批評家もいる。さまざまな情報が次々と出てくるが、依然として謎が残り、全容を把握することは難しい。しかし、自分には関係がない他人事として片づけられない集団心理の盲点を突いた事件である。

理工系の一流大学を卒業した実行犯の広瀬健一（1964～、死刑囚）は、村井秀夫から「地下鉄にサリンを散布しろ」と言われた時、「犠牲者が出ることを思うと非常に恐ろしくなった」と人間としての本能的な抵抗感を強く感じながらも、オウム真理教の科学技術大臣の命令に従った。³³ われわれが日本語で意味する「殺す」という行為が、オウム真理教の用語で「ボアする」と言い換えると罪の意識が消滅する。一般社会から遮断されたオウム真理教の集団的狂気、マインドコントロールが高等教育を受けた人間の判断力を狂わせた。今日まで蓄積された科学の合理的思考や世界観が、オカルト宗教の神秘的な教義の前にもろくも崩れてしまった。人間の自律的に物事の善悪を見分ける判断力が集団的狂気の力に押しつぶされてしまった。同じような葛藤は、戦時中に捕虜を「丸太」と呼んで人体実験をした満州第731部隊の隊員にもあったと想像できる。マッド・サイエンティスト生み出す集団的

狂気は、国家、軍隊、オカルト宗教だけにとどまらず、あらゆる組織、集団において発生する可能性がある。そして、オウム真理教の影響を受けて、名前を変えたオカルト宗教アレフ（Aleph）、理工系の一流大学を卒業した上祐史浩（1962～）の率いる宗教集団「ひかりの輪」が今日でも活動を続けている。

そのような確信的な集団的狂気に打ち勝ち、マッド・サイエンティストの暴走を止めるには、本来的に人間に備わっている感情、人間本来の倫理が尊重される社会のシステムを築かなければならない。最先端の科学技術、生命科学、軍事技術の進歩は、諸刃の剣であり、不測の事態が発生した時、細分化された専門分野の判断だけでなく、個々人の自立した総合的（holistic）な判断が尊重されなければならない。また、専門的な科学の研究に対して外部の人々の判断が反映するシステムが必要であり、「研究倫理審査委員会」のような「社会的合理性」³⁴を判断する組織が必要がある。

※科学技術振興機構社会技術研究開発センターの調査によると、日本の医師や研究者、大学院生などが細胞や化学物質、放射能物質など、科学技術の成果を誤用・悪用した事件や事故は過去80年間で計546件。（毎日新聞 2011. 2. 13）

註

- 1 村上陽一郎『人間にとって科学とは何か』（新潮選書, 2010, 6.25） p.10
- 2 高階悟「テクノロジーの進歩の功罪：『フランケンシュタイン』と『プレイヤー・ピアノ』」『秋田県立大学総合科学研究彙報』第10号（秋田県立大学, 2009. 3.10） p.10
- 3 Mary W. Shelley, *Frankenstein or The Modern Prometheus*, (Penguin Classics, 2003) p.49
- 4 Mary W. Shelley, *Frankenstein or The Modern Prometheus*, (Penguin Classics, 2003) p.59
- 5 小野俊太郎『フランケンシュタイン・コンプレックス』（青草書房, 2010, 2.1） p.24
- 6 Mary W. Shelley, *Frankenstein or The Modern Prometheus*, p.123
- 7 Mary W. Shelley, *Frankenstein or The Modern Prometheus*, p.102
- 8 Mary W. Shelley, *Frankenstein or The Modern Prometheus*, p.219
- 9 小野俊太郎『フランケンシュタイン・コンプレックス』（青草書房, 2010, 2.1） p.48
- 10 村上陽一郎『文化としての科学/技術』（岩波書店, 2006, 5.8） p.8
- 11 新戸雅章『逆立ちしたフランケンシュタイン』（筑摩書房, 2000） p.90
- 12 H.G. Wells, *The Time Machine*, (Penguin, 2005) p.91
- 13 H.G. Wells, *The Island of Doctor Moreau*, (Penguin, 2005) p.71
- 14 H.G. Wells, *The Island of Doctor Moreau*, (Penguin, 2005) p.144
- 15 H.G. Wells, *The Island of Doctor Moreau*, (Penguin, 2005) p.130
- 16 小野俊太郎『フランケンシュタイン・コンプレックス』（青草書房, 2010, 2.1） p.53
- 17 小野俊太郎『フランケンシュタイン・コンプレックス』（青草書房, 2010, 2.1） p.206
- 18 新戸雅章『逆立ちしたフランケンシュタイン』（筑摩書房, 2000） p.325
- 19 新戸雅章『逆立ちしたフランケンシュタイン』（筑摩書房, 2000） p.304
- 20 齊藤次郎『手塚治虫がねがったこと』（岩波ジュニア新書, 1999） p.11
- 21 手塚治虫『火の鳥：復活・羽衣編』（角川書店, 1995） p.268
- 22 新戸雅章『逆立ちしたフランケンシュタイン』（筑摩書房, 2000） p.94
- 23 Michael Crichton, *Jurassic Park*, (Ballantine Books, 1990) p.284
- 24 村上陽一郎『人間にとって科学とは何か』（新潮選書, 2010, 6.25） p.51

- 25 ジム・ベントン (Jim Benton) 作の子供用 SF 読み物『キョーレッツ科学者・フラニー』(Franny K. Stein, *Mad Scientist*, 2004~)。主人公の少女は、フランケンシュタインの名前を言い換えたフラニー・K.シュタインである。マッド・サイエンティストのフラニーの小学校の先生はシェリー先生 (Shelly) であり、解剖学に関心のあるフラニーがさまざまな奇想天外な発明をする、がそのたびに学校やシュタイン家で事件が起こる。この本は2004年に第一巻が出、2008年に第七巻がでている人気読み物であり、あかね書房から日本語訳も出ている。
- 26 電子ダンス音楽の演奏グループに Growing Mad Scientists (増加するマッド・サイエンティスト) がいることを知る。オランダから生まれた electronic music 音楽の演奏グループで、デビュー曲のタイトルは Chaos Laboratory, 1997年(混沌とした実験室)である。
- 27 森村誠一『悪魔の飽食：「関東軍細菌戦部隊」恐怖の全貌！』(カッパ・ノベルス, 1981) p.197
- 28 森村誠一『悪魔の飽食』(カッパ・ノベルス, 1981) p.18
- 29 森村誠一『悪魔の飽食』(カッパ・ノベルス, 1981) p.232
- 30 郡司陽子『[証言]七三一石井部隊』(徳間書店, 1982) p.98
- 31 村上春樹『アンダーグラウンド』(講談社, 1997) p.33
- 32 林郁夫『オウムと私』(文藝春秋, 1998)
『地下鉄サリン事件から15年』フジ系テレビドキュメンタリードラマ, 2010, 3. 20
- 33 村上春樹『アンダーグラウンド』(講談社, 1997) p.132
- 34 村上陽一郎『人間にとって科学とは何か』(新潮選書, 2010, 6.25) p.107